

目次

| | |
|---|---|
| 『百科全書』とその周辺 (飯野和夫) | 1 |
| カセットテープやビデオテープも貸出 | 5 |
| オンラインジャーナル2,000タイトル 本格提供サービス開始 | 6 |

『百科全書』とその周辺

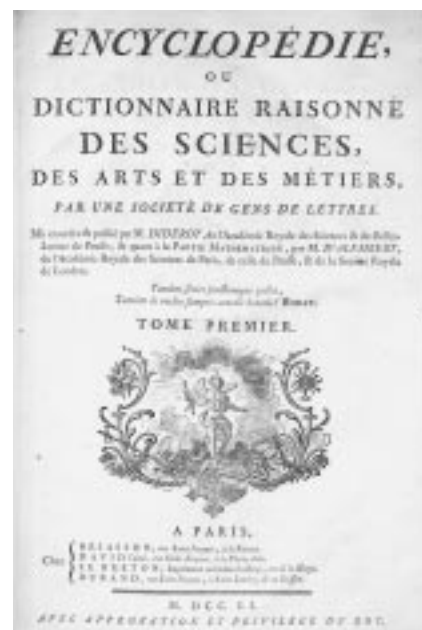
飯野和夫

名古屋大学附属図書館はヨーロッパ近代思想の原典を豊富に収蔵している。「イギリス近代思想史原典コレクション」(通称「ホブズ・コレクション」)、「18世紀フランス自由思想家コレクション」、「言語哲学コレクション」がそうであり、単独でも『百科全書』初版をはじめ重要著作を多く所蔵している。

1999年11月22日から28日まで附属図書館中央館において開催された「『百科全書』とその時代」という蔵書展示会は、本学が所蔵するこうした貴重な原典資料の一部を、18世紀フランス

の『百科全書』を中心に据えて紹介しようと企画されたものだった。期間は短かったが、多くの熱心な見学者にご来場いただいた。ここでは、展示会のカタログを補うかたちで、『百科全書』とその周辺についてふれてみたい。[以下、展示会でその著作を展示した人物には*印を付す。]

近代市民階級が台頭した18世紀中葉のフランスでは、社会の変化に即した新しい知を総合しようという機運が高まっていた。すでにイギリスではチェインバース編の『百科事典(サイク



「百科全書 学問・技芸・工芸の合理的辞典」第1巻扉絵と標題紙

ロピーディア)』(全2巻、1727)などが成功を収めてもいた。そうした中で、『百科全書』はパリの出版業者ル・ブルトンのもとでチェーンバーズの辞典の翻訳の企画としてスタートした。編集者に迎えられたディドロ* とグランベール* は、大幅に規模を拡大した全く新しい事典へと企画の見直しを行い、多くの進歩的知識人から協力の約束を取り付けて、熱心に編集の仕事に当たった。

アルファベット順の編集による第1巻は1751年7月に発行された。だが、その内容に含まれる無信仰などについて反対派の圧力が加わり、1752年1月に第2巻が刊行されると、既刊2巻の配付停止が命じられた。しかし、図書監督局長官マルゼルブ* らの力添えもあって、結局、1757年までに第7巻までを刊行することができた。予約者1000人ほどでのスタートだったが、この時点で購読者は4000人に達していた。

1759年には、言論統制の強化の中で再び出版許可が取り消された。この過程でグランベールは編集者を辞任するが、ディドロは秘密裏に続く巻の編集を続行し、ついに1766年に残る10巻がスイスの書店の発行という体裁で刊行された。1762年から刊行されていた図版も、1772年に11巻の刊行を終えた。

執筆者が200人以上にのぼる大事業はこのように多くの障害を乗り越えて実現され、刊行された『百科全書』は大きな成功を収めることになった。

『百科全書』の執筆者たちは、安い原稿料で、場合によっては無報酬でこの事業に参加していた。その大部分は多かれ少なかれ富裕な階層に属していたのは確かだが、生活のため実質的な仕事に従事していた者が多かった。

執筆者の中には、確かにテュルゴら貴族階級の名門の出身者もいた。法服貴族(ブルジョワジー出身の上級司法官僚などが爵位を購入して貴族に列せられた家系)の中にもモンテスキュー*、ド・ブロス* らがおり、フォルボネ* も爵位を手に入れている。しかし、『百科全書』の執筆者の中では、貴族階級の者はむしろ少数派である。

一方、国家の行政官を経験した多くの人たち

が執筆陣に加わっている。テュルゴ、フォルボネ、ドーバントン、ブランジェ* 等々多くの人を数えることができ、その執筆分野も多岐にわたる。次いで、医学、数学、博物学といった理系の学問の多くの研究者がいる。グランベールも数学者として出発している。彼らの内には医者や外科医を開業していた者も多かった。さらに、「文学者」ないし「哲学者」の一群がおり、ディドロ、デュマルセ*、マルモンテル*、そして大家として執筆協力をしたヴォルテール*、ほどなく百科全書派と袂を分かつことになるルソー* 等々の名を挙げることができる。彼らには文法や哲学などを教えていた者が多かった。また、執筆者の内には、ド・ブラード師* らの聖職者もいた。

『百科全書』を支えた人たちとしては、さらに技芸・工芸の図版集の作成にかかわった版画家、製図家、建築家たちがいる。また、高度な技能を持つ職人たちが、特に各種の技芸を記述した「技芸の解説(デスクリプション・デ・ザール)」と呼ばれる多くの項目に協力している。この専門職人の中には『百科全書 序論』で名前を挙げられている人たちもいる。最後に、この「技芸の解説」は、自ら素材となった多くの無名の職人たちによって底辺を支えられていた。

『百科全書』の執筆者、あるいは専門職人ら協力者の社会的活動は、すでに社会にかなり大きな比重を占めていたことが想像されよう。彼らは当時の社会をリードする階層に属し、その階層を代表していた。J・ブルーストは、彼らに共通の性質を「生産的・創造的活動に直接間接に参加」していたことであるとし、彼らは「各自の分野で過去の桎梏から解放され」た、「19世紀の産業革命の理論的、技術的基盤を準備した人たち」であるとしている(『百科全書』岩波書店、1979、p.109、p.114)。

この点と関係するが、『百科全書』で広く評価され、大きな影響を与えた分野は、ディドロが直接監督してまとめた「技芸の解説」の諸項目であり、それらの図解となる図版だった。『百科全書』刊行後、各国で等しく評価されたのもこの分野だった。

ディドロ自身が最も誇りにしていたのもこの部分のようだ。」。プーレストは、「技芸の解説」のねらいを、自分の職能に閉じこもりがちな専門家に他人の職能に通じさせ、それを各自の技芸の完成に役立てさせたいというものだったと推測している（前掲書 p.202）。ディドロは、既成の社会秩序の内部で生産力の発展を阻害する同業組合制度などを打破しようとしていたし、発明を秘密にせず、広く共有していくべきだと考えていたのだ。そして、これはまた、経済発展のために伝統的な規制を緩和させようという政府、行政の一部進歩派の動きとも呼応するものだった。

ディドロが技芸の分野と同様に重視していたのは、『百科全書』全体の支えとなるべき「哲学」の分野だった。

百科全書一般の目的は、「地上に分散している知識を集め、その一般的体系を当代の人々に示し、また、後からくる人々に伝えること」であるとされた（項目「百科全書」）。ディドロたちの『百科全書』は「事物の真の原理を解明し、それらの関係を指摘し、人間知識の確実性と進歩に寄与するだろう」ともされている（「百科全書 趣意書」）。

つまり、人間の知識の進歩、啓蒙の進歩への信念がディドロ、ダランベールから、テュルゴやコンドルセ*らにまで至る百科全書派の共通の実践的立場だった（ルソーのみこの点で立場を異にしていた）。

彼らの哲学の具体的内容について言えば、多くの者はロックの流れをくむ経験論・感覚論に基礎を置いていた。政治に関しては、人間の「自然権」を認めた上で、自由に制度や社会を論じた。理想の政体についても、啓蒙された君主制を唱える者が多かったとは言えようが、具体的な見解は多様だった。だが、神権による君主制を否定する彼らの見解は、反対者たちにとってはすでに十分に危険なものだった。宗教については、多くの者は合理的なキリスト教、あるいは自然宗教に共感を覚えていた。ディドロが唯物論者だったとはいえ、多くの者は唯物論には反対していた。結局、百科全書派は、感覚的経験に基づいた知性を信頼し、自ら自由にそ

れまでの支配的哲学を再検討したのだった。

こうして、百科全書派の人たちは個々の問題についての見解は多様だったが、ディドロは執筆者たちに自由な意見の表明を許していた。その際、彼は「参照符号」によって他の項目で表明される異なった見解を示し、読者が自ら判断することを求めている。一つの項目で、複数の署名者がそれぞれ自分の見解を表明していることや、重要な主題について、見解を異にするいくつかの項目が立てられることもあった。『百科全書』はさまざまな意見の自由な交換の場だったのであり、この自由な対話の精神は今日でもなお輝きを失っていない。

著作としての『百科全書』の周囲に目を向けてみよう。

執筆者の内、かなりの数の人たちが個人としても旺盛な著述活動をしている。そうした著作のほとんどは『百科全書』と何らかの関係を持っており、『百科全書』と一体となってダイナミックな思想の運動を形成している。先の展示会で執筆者たちの著作を合わせて展示したのも、こうした思想の運動を全体として浮き彫りにしたかったからにほかならない。

『百科全書』の擁護者にはどのような人たちがいたのか。王政の側で『百科全書』を支えた代表的人物は、図書監督局長官マルゼルブを措いていない。彼は王政内の進歩派として検閲制度の弾力的運用を行い、『百科全書』の刊行に便宜を図った。その父ド・ラモワニオン大法官の失脚にともなって、マルゼルブは1763年に図書監督局長官の職を辞するが、この危機も、後を継いだのがサルチーヌであったことで事なきをえた。彼もまた進歩派の官僚で、マルゼルブの路線を踏襲した。彼ら以外にも、『百科全書』の理想に共鳴し王政内部で支援を惜しまない人たちがいた。百科全書派の人たちが、こうした支持者の手によって『百科全書』の原則が実現されることを期待していた面もあろう。なお、別格の支持者としてポンパドゥール夫人の名も忘れてはなるまい。

『百科全書』の予約講読者となって事業を支えた人たちの構成は、『百科全書』の作成に携わった人たちの構成とほぼ一致するという（前

掲書 p.118) つまり、当時の社会をリードしたブルジョワジーが中心である。貴族など本来保守的な層にも購入者はいたが、彼らは教養人としてどのような著作であれ広く購入したのだろう。手工業者、農民たちが購入することは价格的にありえなかった。ただ、当時、『百科全書』の精神を反映した安価な小冊子が出回り、農村地域にまで行商人の手で運び込まれていた事実が指摘されている。

他方、カトリック、とりわけイエズス会やジャンセニストは、『百科全書』の内に伝統的秩序の解体につながる原理を見て取り、批判の論陣を張った。百科全書派との論戦は雑誌に掲載される論文などを通して行われることも多かったため、『百科全書』の刊行によってジャーナリズムは大いに活性化した。

百科全書派の側でも、初めからジャーナリズムの重要性は理解されていたようで、重要な項目をパンフレットとして配付したり、雑誌に独自に掲載したりした。ただし、百科全書派ははっきりとした同盟誌はあまり持つことはできなかった。印刷されて配付された唯一の同盟誌と言えそうなのが、リエージュ、次いでブイヨン(ともにベルギー)で発行されていた『百科全書新聞(ジュールナル・アンシクロペディック)』だった。この新聞は『百科全書』のさまざまな項目の抜粋をしばしば掲載したし、反対派との論争の過程では絶えず百科全書派を擁護した。

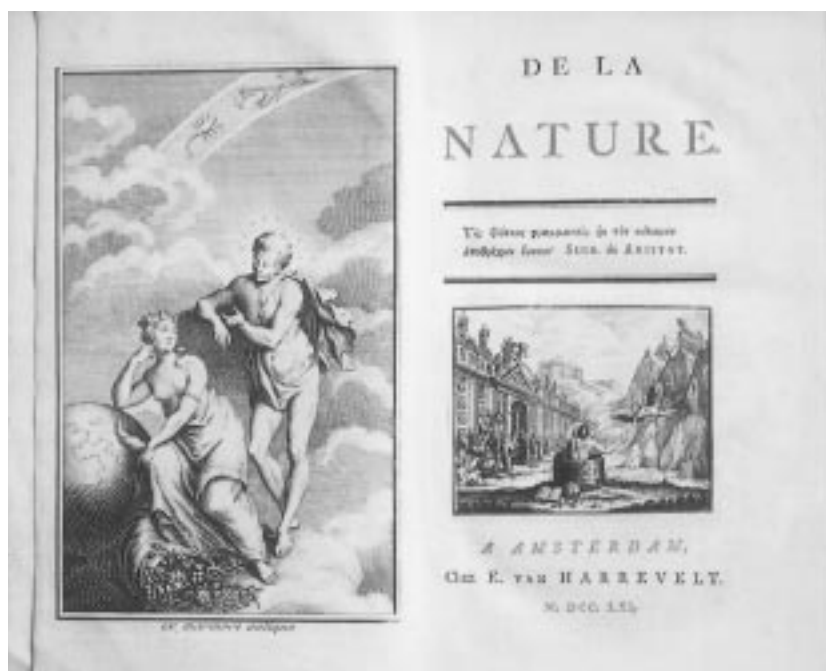
パンクークはル・ブルトンとともに18世紀フランスを代表する出版業者であり、著名な雑誌を発行したり、最初の重要なヴォルテール全集の刊行に関わったことなどでも有名だが、1776年から翌年にかけての『百科全書 補遺』(本文4巻、図版1巻)の刊行を主導した。マルモンテルら本編の執筆者の一部はそのままこの『補遺』にも執筆したし、コンドルセらが新たに執筆者に加わった。この『補遺』の刊行の経緯はまだあまり研究が進んでいないが、『百科全書新聞』

刊行の地ブイヨンに在住していたJ. B. ロビネ* が、この地で編集に当たったと考えられている。彼は特異な物活論的唯物論の著作を残した思想家でもあった。他方、パンクークはその後さらに、分野別編成による大規模な『系統的百科事典』(1782年~1832年、199巻)の刊行を開始している。

『百科全書』の後世への影響を考える際には、『百科全書』にさまざまな補正を加えてスイスのイヴェルドンで刊行された、いわゆるイヴェルドン版『百科全書』などにも今後目を向けていく必要がある。誰しも興味を持つであろうフランス革命との関係も、さらに研究を深めなければならないきわめて重要な問題であろう。

『百科全書』はその内容においても、それが刊行された時代としても、また、それにまつわる人間模様においても魅力的な研究対象であり、現代に生きる私たちもさまざまな観点で教えられるところが多い。『百科全書』とその時代に興味を持ち、名古屋大学が所蔵する貴重な蔵書を研究に活用しようという人が一人でも多く現れることを期待したい。

(いいの・かずお 言語文化部教官)



ロビネ「自然について」

カセットテープやビデオテープも貸出

中央図書館では図書のほか、いわゆる視聴覚資料と呼ばれるビデオテープやカセットテープも、一部の資料を除いて館外への貸出を行っています。

カセットテープは語学学習を目的としたもので、英・独・仏語のほか、ロシア語、中国語、韓国語、日本語などを含め、40か国語以上を揃えています。語学テープは今年度、新しいものを追加しました。これらにはCDの形態のものも含まれています。

ビデオテープは日本語学習のための語学教材以外に、美術、演劇、手話、歴史、生物など様々な分野のものが900巻ほどあります。

ほんの一例です。

カセットテープ

- ・中国語実習コース
- ・アメリカ口語教本（入門～上級用）
- ・CDゼミ フランス語聴解コース
- ・コレクションドイツ語
- ・イタリア語のABC

ビデオ

- ・ユネスコ世界遺産
- ・書物5000年
- ・日本語 見る・聞く・話す
- ・実録第二次世界大戦史
- ・国立民族学博物館ビデオテープ・プログラム（館内）



利用について

| 貸出できる人 | 利用・貸出手続き時間 | 貸出日数 | 貸出本数 |
|--------------|----------------------|--------------|-----------------------------------|
| 名古屋大学 在籍者 | 平日9時～17時 返却は開館時間中 | 1週間 更新は不可 | 1本（1ケースに複数テープ入っているものは1ケースを1本と数える） |

カセットテープの配置場所（2階）



カセットテープは2階受付カウンターで学生証・職員証と引き換えに保管ケースの鍵を受け取って、自分で取り出してください。

ビデオテープの配置場所（3階）



ビデオテープは開架式になっていますので自由に取ることができます。

なお、著作権上の制約で館外貸出ができないものは禁帯出ラベルが貼ってあります。

カセットテープもビデオテープも、貸出・返却手続きは2階受付カウンターで行います。

オンラインジャーナル2,000タイトル本格提供サービス開始

1. オンラインジャーナルとは

学術雑誌は今まで紙の出版物として郵送等で研究者の手元や図書館に送られてきています。ここ10年ほどの間に学術雑誌の出版社等が雑誌そのものを電子ファイル化し、CD-ROM等の媒体に記録して出版する電子ジャーナルが見られるようになりました。また、出版社等が多数の雑誌を電子ファイルの形式でサーバに蓄積し、インターネットを通じて研究者の手元にあるパーソナルコンピュータやワークステーションから利用できるようにしたオンラインジャーナルが急激に普及しています。オンラインジャーナルには、従来のプリント版に対応するものとプリント版を持たないものがあります。現在出版されているオンラインジャーナルの数は1万タイトル以上あるといわれています。欧米の大学図書館で数千タイトルを越えるオンラインジャーナルの利用が行われているところは珍しくありません。

2. 名古屋大学附属図書館におけるオンラインジャーナルのサービス

名古屋大学附属図書館では、オンラインジャーナルが教育研究に不可欠であることからプリ

ント版を購読している数百タイトルに及ぶ外国のオンラインジャーナルを次のページから学内へサービスしてきました。

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/cgi-bin/online/goto.cgi>

3. 新しいサービスの開始

この度、3年間の試行ということで教育研究特別経費の配分を受けて契約したものに加え、Elsevier社のScience Direct-21のサービスも受けられることになり、あわせて外国のオンラインジャーナル約2,000タイトルのサービスを新たに2000年1月1日から始めました。このサービスによってNICEに接続されている学内の端末からNetscapeやInternet Explorer等のWWWブラウザで無料でいつでも雑誌の全文を利用できます。新しいサービスが積極的に教育研究に活用されることが期待されます。

4. サービス内容

新たに利用できる外国のオンラインジャーナルは、2,089タイトルで、内訳は次のとおりです。雑誌論文の書誌的事項(著者、論題、掲載雑誌等)の収録対象は6,290タイトルです。

| データベース名(提供者)利用期間 | 全文が利用できるタイトル数 |
|--|--|
| EBSCOhost Academic Search Select (EBSCO) 2000.1.1 ~ 2002.3.31 | 613タイトル(内、名大でプリント版を購読しているもの150タイトル)収録対象3,000タイトル |
| FirstSearch ECO (OCLC) 2000.1.1 ~ 2002.3.31 | 386タイトル(名大で全てプリント版を購読)収録対象2,200タイトル |
| Science Direct-21 (Elsevier) 2000.1.1 ~ 2002.12.31 | 1,090タイトル(内、名大でプリント版を購読しているもの419タイトル) |

(1) 分野

利用できる雑誌の分野別の割合はほぼ人文社会科学分野と理工学医学系が同じです。どちらかというとEBSCOhost Academic Search Selectは人文社会科学分野が中心で、Science Direct-21は理工学・医学分野が中心です。

(2) アクセス

次のページにアクセスします。

日本語版

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/FullText/FullText.html>

英語版

http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/Fulltext/FullText_e.html

オンラインジャーナルの各サービスのメニューがあります。それぞれのサービスを利用します。

FirstSearch ECO及びScience Direct-21では雑誌のタイトルから特定の巻号を指定して目次を閲覧して論文を見ることができます。また、論文の著者、論題、キーワードから必要な論文を探してその全文を見ることができます。EBSCOhost Academic Search Selectでは、論文の著者、論題、キーワードから必要な論文を探してその全文を見するという方法になります。雑誌のタイトルに

よる絞り込みができます。

(3) 論文の利用

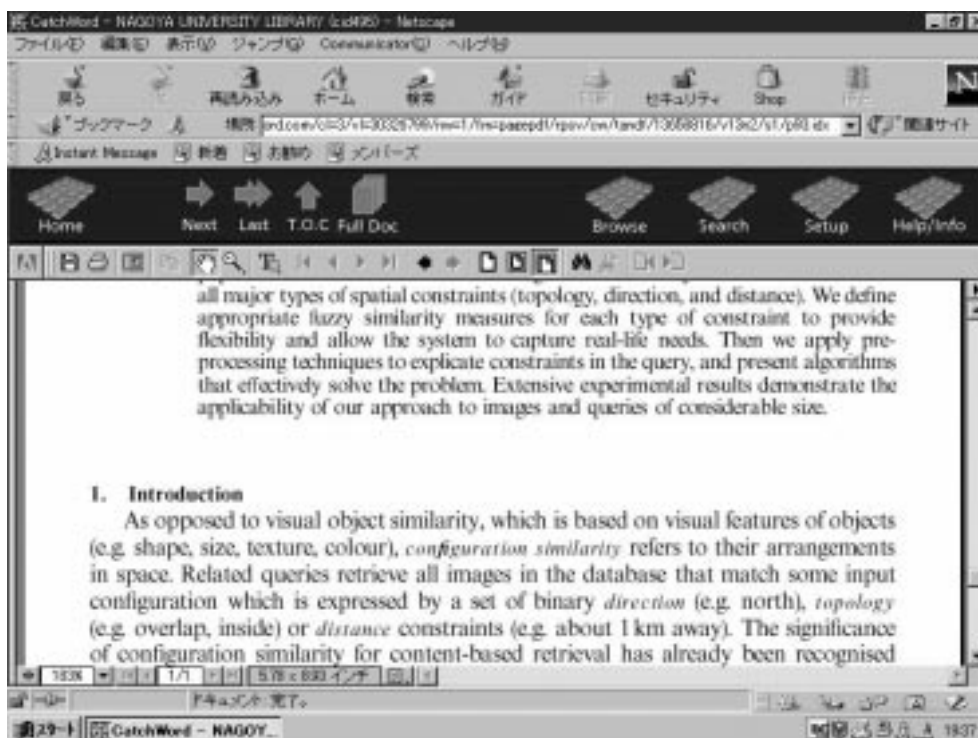
EBSCOhost Academic Search Select は、本文はテキスト形式で、図版は画像ファイルで提供されます。FirstSearch ECOとScience Direct-21は雑誌論文の電子ファイルが PDF (Portable Data

Format) で提供されますので手元の端末にダウンロードしてプリント版の雑誌と同じ品質で印字することができます。FirstSearch ECO の論文検索結果画面と論文表示画面を以下に示します。

論文検索結果画面



論文表示画面



〔国内図書館関係日誌〕

- 11.10.13~10.14 第32回国立七大学図書館部課長会議・第73次国立七大学附属図書館協議会(於:大阪大学)出席者:戒能館長、田村事務部長、小花情報システム課長
- 11.10.22 第47回国公立大学図書館協力委員会(於:慶應義塾大学)出席者:戒能館長、田村事務部長
- 11.11.17~11.18 第12回国立大学図書館協議会シンポジウム(於:岡山大学)出席者:中井情報サービス課図書館専門員
- 11.11.24 平成11年度第2回国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会(於:東京大学)出席者:田村事務部長、小花情報システム課長
- 11.11.25~11.26 平成11年度第3回国立大学図書館協議会理事会等(於:名古屋大学)出席者:戒能館長、田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長、小花情報システム課長
- 11.12.8 文部省学術情報課による東海地区国立大学図書館のヒアリング(於:名古屋大学)
- 11.12.8 東海地区国立大学図書館協議会事務連絡会(於:名古屋大学)出席者:田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長、小花情報システム課長、本多情報管理課課長補佐、中井情報サービス課図書館専門員、加藤情報システム課図書館専門員

〔学内動向〕 <11.10.6-12.1.5>

会議

- ・第11-3回図書館システム検討委員会 <10.7>
- ・第11-3回蔵書整備委員会 <10.21>
- ・第11-4回電子図書館推進委員会 <11.16>
- ・第11-5回学術情報事務連絡会 <11.29>
- ・第11-4回図書館システム検討委員会 <11.30>
- ・第11-4回蔵書整備委員会 <12.3>
- ・第11-4回商議員会 <12.7>
 - ・附属図書館将来構想について
 - ・平成13年度概算要求について
 - ・平成11年度図書購入費予算の補正について
 - ・電子ジャーナルの導入について
 - ・高木家文書のデータベースの作成について
- ・第11-6回学術情報事務連絡会 <12.24> 研修・講習会等への参加
- ・平成11年度学術情報センターシンポジウム「21世紀にむけての学術情報サービス」(於:京都市) <10.15>

参加者:岡田智行(医短)

- ・平成11年度東海地区大学図書館協議会第1回研修会(於:名古屋大学) <11.11.2> 参加者:98名
- ・展示会「百科全書」とその時代展・記念講演会(於:名古屋大学) <11.11.22~11.28> 参加者:433名
- 人物往来
 - <ご多幸を祈ります> 退職された人 富田せい子(情報管理課庶務掛) 11.15.
 - <はじめまして> 新しく採用された人 小塚道代(情報管理課庶務掛) 11.16
- 部局動向
 - ・教育学部図書室、平日夜間・土曜開館業務の試行実施(12月~2月、平日17時~19時、土曜13時~17時)
 - ・教育学部HPで「敗戦前文部省刊行教育統計書・一覧類の簡略目録」公開(11月)
 - ・多元数理研究科図書室HP開設(11月)